

グラムシ批判

共産主義者同盟マルクス・レーニン主義派（1981年）

グラムシ批判

はじめに

『マルクス・レーニン主義通信』40号（1978.07）掲載

〈1〉社会学的「市民社会・国家」論

〈2〉「受動的革命」と統一戦線

〈3〉グラムシの組織論

『マルクス・レーニン主義通信』41号（1978.08）掲載

グラムシ批判

はじめに

今日、グラムシの評価を明らかにすることの意義は、もちろん共産主義者同盟が、かつて政治理論の一部をグラムシに依拠していたことから必然的に出てくるのと同時に、スターリン主義の誤謬の克服がグラムシの政治理論によって可能であるかのように考える人々が、スターリン主義の流れを組む部分のみならず、ブルジョア・インテリゲンチヤ、そして、かつてのフロントの諸君（関西ブントも曖昧であった）のようないわゆる反スターリン主義者たちにも存在していることから生ずる。

これらの人々は、例えばフランス共産党の異端者アルチュセールが、「マルクスおよびレーニンのうちには、二つの重大な理論的欠落が認められる。一つは国家に関して、もう一つは階級闘争組織に関してである」と語り、また別のところでは「誰が真にマルクス、エンゲルスの行なった探求をさらに突き進めて行こうとしたか…私には、グラムシしか思いつかない」と述べているように、スターリン主義の原因をマルクス、レーニンの「欠落」に求め、グラムシがその「欠落」部分を補ったかのように主張しているのである。これらの人々の主張が、果たして正しいのか否か、それは論が進むにつれて明らかになるであろう。

そして何よりも、今日の国際共産主義運動において、グラムシの評価を明確にすることの重要性は、グラムシの子孫たるイタリア共産党が、“ユーロ・コミュニズム”という「新たな」潮流の首領におさまっているというふうに存している。

最近日本で発刊された『グラムシ』の著者 J・ジョルは、「いかにして一つの階級が、その政治力とは別に文化的、道徳的優越性を確立することができるかを説明する『ヘゲモニー』論、あるいは『積極的』革命と『消極的』革命の区別など、グラムシの最も重要な観念の多くは、共産党が現実に政府を握っていなくとも、影響力を拡大し支持を増大させていく—1970年代のイタリアの党はそうしつつあるように見える—ことができる道を示しているように思われる」、「彼はマルクス主義思想と非マルクス主義思想との間に掛け渡すことができる一つの橋となつていくように思えるのである」と述べている。

我々は、この J・ジョルとは全く反対の立場からであるが、このジョルの言葉に拍手を送りたい。すなわちグラムシは、まさしくブルジョア修正主義への「一つの橋」となる可能性を秘めていたのであり、その意味で、“ユーロ・コミュニズム”の始祖と言いうるからである。

なお、今回のグラムシ批判では、彼の政治理論を中心とし、「哲学の基礎に意思…を置かなければならない」というような、哲学的観念論の傾向、歴史理論における色濃いクローチェの影響、などについては必要最低限にとどめることにしたい（グラムシからの引用でことわりのないのは全て『獄中ノート』による）。しかも、いわゆるグラムシの思想と言われているものは、獄中での著作によるものだからして、当然にもその晩年の「完成」した思想の批判が中軸とならざるをえない。

〈1〉社会学的「市民社会・国家」論

グラムシは、ブハーリンの史的唯物論を、素朴反映論的な唯物論、「もう一つの神秘主義」として批判し、い

わゆる“経済決定論”を否定して、“意志”の力を強調している。

彼は言う、「この意志は初めは一人の個人によって表現されたとしても、その合理性は、それが多数の人々によって迎えられる、しかも永続的に迎えられるという事実、すなわち、その意志が一つの文化、一つの『良識』、その構造に照応する一つの論理を持った世界観となるという事実によって裏書きされる」、「実践の哲学(マルクス主義哲学—引用者注)だけが、ドイツ古典哲学を土台として、独我論へのあらゆる傾向を避け、思想を多数の人々の間に普及した、しかも行為の能動的規範に転化するような仕方でも普及した世界観、『良識』…とみなすことによって歴史化して、恣意を前進させたように思われる」と。

だが、このような“上部構造は下部構造に規定される”というドグマを逆手にとって、下部構造に照応する意志が「合理性」をもつという考えは、新たな世界の解釈を生み出すのではなからうか。それは、物質と意識の他に、第三者として“意志”を措定しようとする、“第三の哲学”への屈伏ではないだろうか。かくしてグラムシは、知識人の役割を不当に強調することになるのであるし、また後に見るように、“市民社会”を「上部構造」的に把握してしまうのである。

このような思想をもつグラムシは、独特の市民社会論—国家論をものにする。「国家＝政治社会＋市民社会…すなわち、…強制力の鎧をつけたヘゲモニー…」という有名なテーゼは、マキャベリの“強力と同意”という概念を継承するものである。

そしてこのグラムシの方法論は、国家—党—市民に貫かれるのであって、またそれは、独裁—ヘゲモニー、政治社会—市民社会という概念としても語られている。しかも彼は「さしあたって上部構造の二つの大きな『次元』を定めることができる。すなわち、一つは『市民社会』と呼べるもの…云々」というように、市民社会を上部構造として捉えているのである。

このような方法論は、ヘーゲルに通ずるものであり、「法的諸関係並びに国家諸形態は、…物質的な諸生活関係(＝市民社会—引用者)に根ざしているものであって、…市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならない」(『経済学批判・序言』)というマルクスの認識に全く反するものである。

さらにヘーゲルの官僚制論を引き継いで、官僚制を近代ブルジョア国家の支柱としていることからわかるように、そのことは同時に、グラムシとウェーバーとの共通性を示している。ウェーバーもまた、支配概念を「力(マハト)」と「正統性の進行・従順性」という二契機をもって説明しているのだ。このことから明らかになるのは、グラムシの市民社会—国家の理論は、まさに“社会学”であるということである。従ってそこからは、国家を階級対立の非和解性の産物として捉えることを捨象した、国家に対する日和見主義的な理論が不可避なのである。

このようなグラムシは、「…実際には、国家と自己との終焉を到達すべき目標として提起する社会集団のみが、被支配者の内部分裂を終わらせて統一的な技術的—道徳的な社会的有機体の創造を目指す倫理的國家を創設することができる」というように、プロレタリアートの使命をも、未来をも、まさに道徳主義的、倫理的にしか語りえないのである。

これらのことは、あるいは、獄中で、権力の検閲を考慮して執筆されたことに規定されているのかもしれない。だがレーニンが「イソップの言葉」で『帝国主義論』をしたためたのである。

このようなグラムシの、市民社会—国家の“構造”的な把握は、また、資本主義の“構造”的な分析、「資本主義の型」の分析を生み出している。そしてこれは、スターリンがそうであったように、グラムシにしても、時節で見る彼の戦術を正当化するための武器としてなされるのである。曰く、「社会構造の弱さ」(イタリアには、プロレタリア革命の最も恵まれた条件が、必ずしも資本主義と工業が最高度の発展に達した国にあるのではなく、逆に資本主義体制の組織が、構造の弱さのために、革命的階級とその同盟者の攻撃によりわずかな抵抗しかできないようなところに存在するというテーゼの確証がある)(『リヨン・テーゼ』)。そして、かの『階級配置論』がそれに続く。

〈2〉「受動的革命」と統一戦線

前説で見たようなグラムシの理論からは、不可避的に、観念的、日和見主義的な階級闘争観—戦術が導き出されざるをえない。

G・フィオーリ(『グラムシの生涯』の著者)は次のように述べている。「グラムシにとって、問題は、いかにして支配階級が従属諸階級の合意をえることに成功したか、またこれら従属階級は、いかにして旧秩序を破壊し、万人にとっての自由であるところの新しい秩序を打ち立てることができるか、という点にある」、と。そして、それが「マルク主義の経済主義的、機械論的、宿命論的墮落」の克服の途である、と。

かくして、かのヘゲモニー論がそれに解答を与えるのである。「ある社会集団の覇権は『支配』および『知的道徳的指導』という二つの様式で現れる。ある社会集団は、それが武装力に訴えても『一掃し』あるいは服従させようとする敵対的集団に対して支配的であり、そして近親の同盟諸集団に対して指導的である。ある社会集団は統治権力を獲得する以前から、すでに指導的でありうるし、また指導的であらねばならない。…その後、権力を行使するときにも、またこの権力を強力に掌握している場合でさえも、その社会集団は支配的になってはいるが、しかし、やはり『指導的』でもあり続けなければならない」、と。またしても“強力＝支配”と“同意＝指導”である。このように「同意の確保」(竹村英輔『グラムシに思想』)の強調からして、グラムシのいう“ヘゲモニー”とは、「知的・道徳的指導・変革」の要素が前面に出ているものである。従って、結論的に言えば、それは、階級闘争を知的・道徳的変革にすり替えるものに他ならない。

ヘゲモニーの概念が、グラムシの思想の全領域にわたって中心的なものであるのは周知の通りである。そしてそれは、レーニンを継承するものとされているのである。グラムシは語る。「彼[レーニン]の政治的独創性、彼の主要な特徴はどこにあるか。ボルシェビズムは国際階級闘争史で初めてプロレタリアートのヘゲモニーの観念を展開し、マルクス＝エンゲルスが理論的に予期した革命の主要な諸問題を実践的に提起した」、「メンシェビズムと分裂した後、レーニンがその著『二つの戦術』で初めて示したボルシェビズムの見解の重要性が、ほかならぬイタリアでは 1920 年 9 月の工場占拠以降に現われている。…労働者の援助なしに、農民は土地を得られず、農民の援助なしに、労働者は資本主義を倒すことはできない。しかし、政治的には労働者に比べてより強力であり、より有能である。労働者は都市に居住し、工場に大量に集中し、資本主義を打倒しうるのみならず、工場を社会化して資本主義の回帰を防ぎうる地位にある。だからこそ革命は実際には、自らの同盟者、農民を指導するプロレタリアートのヘゲモニーとして出現するのである」(『オルディネ・ヌオーヴォ(新しい秩序)』)。

かくしてグラムシは、階級闘争をヘゲモニーの問題にすり替えたことに対応して、独裁をヘゲモニーへとすり替えるのである。このグラムシのヘゲモニーの思想は、一言で言えば階級協調の思想に他ならない。

このようなグラムシの思想が具体的に表現されるのは、その統一戦線戦術である。グラムシは、イタリア共産党第 3 回大会(リヨン大会)で、レーニンに批判されたボルディーガ派＝「左」翼共産主義者と論戦し、「どんな国でも、プロレタリアートは自分の力だけでは権力を奪取し保持することができない」と述べている。

もちろんグラムシにしても、当初はファシズムに対抗するものとして統一戦線を考えていた。1924 年 6 月 10 日のマッテオッティ事件を機に形成されたアヴェンティノー諸派は、「ムッソリーニが憲法上の合法性の再興を保証しさえすれば政府を支持してもよいという、本質的に半ファシズム的な一翼から、大衆に訴えかけて政府を打倒しようとする小党派…、すなわち共産党まで、連合し」(G・フィオーリ)他のものであって、「しつこい喊声」(ムッソリーニ)以上ではなく、グラムシは、積極的な野党統一戦線を提案していた。(注)マッテオッティ事件＝改良派社会党代議士マッテオッティが国会でファシスト政府批判の演説を行ったのち誘拐され殺害された白色テロ事件。

だがグラムシは、アヴェンティノー諸派の無力さから、「…ブルジョア秩序打倒の決定的な攻撃の前に、失った陣地を取り戻さなければならない…。…ブルジョア的なものまで含めて、すべての反ファシスト勢力と広汎な同盟体制を作り上げなければ、失った陣地の回復はできない」という総括を導き出したのである。

さて、グラムシに限らず、統一戦線から革命を展望するものは、コミンテルン第 3 回大会でのレーニンの統一戦線の理論に基づいていると主張している。だが、はたしてそうであろうか？

1921 年 6 月 22 日～7 月 12 日に開催されたコミンテルン第 3 回大会は、情勢分析における「労働者階級の一連の蜂起と闘争が部分的敗北をもって終結した」、「現在、権力のためのプロレタリアの公然とした革命的闘争が多くの国で、緩慢になっていることは争いえない」という革命情勢の退潮に対応して、「労働者階級の多数に対する圧倒的影響力を獲得すること、彼らの決定的部分を闘争に引き入れること」が緊要である年、共産党の大衆化と「プロレタリア統一戦線」―「大衆の中へ！」をスローガンとした統一戦線戦術を採用し

たのであった。

レーニンはこの大会で、「戦術の再検討に着手する」という戦術テーゼを「左」派から擁護する演説を行うと同時に、「この一年間の国際革命の発展が我々の期待したほど一直線には進まなかった」「今必要なことは、革命を根本的に準備し、先進的な資本主義諸国における革命の具体的な発展を深く研究することである」（全集 32 巻）と述べ、戦術テーゼは「妥当である」と語っている。また、レーニンは別のところで「第二および第二半インターナショナルの代表にとっては統一戦線が必要なものは、我々に度外れた譲歩をさせて我々を弱めようと望んでいるからである。彼らは、入場料を何も払わずに、我々共産主義者の会場に入り込みたがっており、統一戦線戦術によって、改良主義的戦術が正しく、革命的戦術が誤っているということを労働者に納得させたがっている。我々に統一戦線が必要なものは、我々がその反対のことを労働者に納得させたがっているからである」（同 33 巻）、統一戦線戦術は、「工業的に発展した資本主義諸国における資本主義の主要な支柱」（同 32 巻）たる「改良主義者に完全に『支配されてきた』労働者に、たとえわずかでも呼びかける幾らかの機会がえられるような会場にはいるため」（同 33 巻）の「入場料」であると述べている。

だが、1 年後のコミンテルン第 4 回大会になると様相を異にしてくる。

ジノビエフ報告は、「資本主義に対する勤労大衆の部分要求」を統一戦線戦術の中に取り込み、それは「我々の闘争におけるひとつのエピソードではなく、ひとつの時代、おそらく一つの時代全体を貫くであろう戦術である」と語っている。「反帝統一戦線」が採用されたのもこの大会である。

そして、トロツキーが起草した「戦術テーゼ」は、「統一戦線戦術とは、広範な労働者大衆が彼らの最も重要な死活となる利益のために行う日常闘争において、共産主義的前衛が先導することを意味する」、「統一戦線戦術は、他の党派またはグループに属するあらゆる労働者と共産主義者との、ブルジョアジーに対する労働者階級の最も基本的な生活利益の擁護を目的とする、共同闘争の提案である」と述べている。そして同時に、ブルジョア独裁とプロレタリア独裁の間に、過渡的な政府＝統一戦線政府が存在する“可能性”が打ち出されたのである。G・フィオーリによるそのガイストの説明によれば、「中間目標の転換と、攻撃路線から防衛路線への移行、民主的自由の防衛が目標であって、もはや、少なくともさしあたりは、プロレタリア革命が目標ではない」ということに他ならない。

ここには“過渡的綱領”につらなるトロツキーの日和見主義的性格が現れているのみならず、のちの統一戦線革命論者すべてに共通の日和見主義の源泉がある。曰く、社共共闘が第一義的、曰く、舞う統一戦線政府を、等々。

だがグラムシの、先にみたアヴェンティエーノ諸派の総括は、それよりも進んでいた。グラムシのそれは、1934 年のコミンテルン第 7 回大会での「反ファッショ統一戦線」と共通性をもつものである。否、グラムシの精神を修正主義の立場から継承したトリアッティに指導されたイタリア（およびフランス）の反ファッショ統一戦線、人民戦線としてコミンテルン第 7 回大会の基調があったのである。

グラムシによる“完成”された統一戦線論は、まさに「国民革命」論であり、労働者階級に（小）ブルジョアジーとの協調を説くものである。それは、何万べん「プロレタリアートのヘゲモニー」を語ったところで正当化されるものではない。

このグラムシの“完成”に大きく寄与したのが「受動的革命」論であった。グラムシは次のようにいう。「『受動的革命』の概念は、次の二つの社会科学の基本原則から、厳密に演繹されるはずである。①どのような社会形態も、その内部に発展してきた生産諸力が、まだその前進運動にとっての余地を見出す時には、決して消滅しない、という原則。②社会は、その解決のための必要条件が含まれていないような課題を決して提起しない、という原則。まず、この二原則が、その全有効範囲において、批判的観点から発展させられ、機械論と運命論のあらゆる残滓から洗い清められなければならない」、「リソルジメント期イタリアの『受動的革命』、『革命—復古』の概念に関しては、いつでも次のことに注意しておくことが必要である。すなわち、いくつかの歴史学派でいうところの、歴史的事件における主体的条件と客観的条件の関係の問題を、正確な仕方で提起しなければならない、ということである」。

すなわち、「受動的革命」を「支配と指導」のバランスを欠く変革の解釈の基準とすることによって、“反復”を説くクローチェ（及び「鉄のような経済決定論の一形態」たるローザ）の機械論、運命論を排すると同時に、今日の状況から“陣地戦”を主張するのである。

グラムシはいう。「そうした〔高度に発達した〕諸国では、『市民社会』は非常に複雑な、また直接に経済的要素(恐慌、不景気等)の破局的な『侵入』に対して粘り強く抵抗する構造になっている。この市民社会の上部構造は、近代戦における塹壕体制のようなものだ。塹壕体制のもとでは、一斉砲火によって敵の防御態勢を完全に破壊したように見えても、ただそう見えるだけで、実はその外観を破壊したにすぎず、いざ攻撃、前進という時になると、攻撃側は、なおも強力な防御線に直面することになる…」「だから、市民社会において、陣地戦での防御体制に照応する諸要素がどのようなものであるかを、『深く』研究することが重要である」「機動戦は 1917 年に東方に適用されて輝かしい勝利をおさめ、一方、陣地戦は西方で唯一の可能な形態であった」「東方では、国家はすべてであり、市民社会は幼稚でゼラチン状のものであった。ところが西方では、国家と市民社会との間に正確な関係があり、国家が動揺するとすぐに市民社会の頑強な構造が姿を現した」「この『永久革命』という定式は、大政党も大経済組合もまだ存在せず、社会がまだいわば多様な姿を示す流動状態にあった、一つの時代に特有のものである。…1870 年以降の時代には、ヨーロッパの植民地主義的膨張にともない、これらの要素はすっかり変化し、国家の国内的、国際的組織関係はより複雑に、より巨大になり、1848 年当時の『永久革命』の定式は、政治学の中で仕上げられ、克服されて『市民的ヘゲモニー』の定式となった。軍事技術においては、機動戦は次第に陣地戦となり、一国が勝利をおさめるには平和の時期から戦争を細心に技術的に準備しておかなければならない、と言われるようになったが、それと同じことが政治技術の中にも生じた。近代民主主義の巨大な構造は、国家組織としても、文化生活の中の各種結社の総体としても、政治技術にとっては、陣地戦のために構築された『塹壕』や要塞のようなものである。それは、以前には戦争の『すべて』であった機動戦を、単に『部分的』なものにかえてしまっている」。

なんと、先進国では、武装蜂起—プロレタリア独裁は不可能で、漸進的改革だけが、統一戦線を通じたプロレタリアートの「ヘゲモニー」の拡大だけが絶対だというのだ。ロシア革命を「『資本論』に反する革命」としたグラムシは、「ボリシェビキはカール・マルクスを否定し」(同)たと語ったが、その実、グラムシこそがマルクス主義(=レーニン主義)を「否定」したのであった。

『グラムシの政治思想』の著者 J=M・ピオットは、レーニンの思想とグラムシの思想の相違を適切に特徴付けている。「第 3 回大会の『統一戦線』が状況変化の分析をしか反射していないとすれば、グラムシの戦略は、工業化された国と、そうでない国との構造的差異にもとづくものである。1921 年のインターナショナルの戦略は一時的なものであり、すべての国に妥当する。グラムシの立場は永久的であり一つは東方に、一方は西方に妥当する二つの戦略の同時的存在を意味する」、と。

そして、グラムシが「すべての資本主義国に対して、一つの基本問題、すなわち、一般的な意味に理解された統一戦線の戦術から、民族的生活の具体的諸問題を提起し、歴史的に規定されている人民諸勢力にもとづいて行動する特定の戦術に移行するという基本問題が提起される」(共産党指導委員会予備討議資料、26 年 8 月 2~3 日)というとき、そこには「社会主義への多様な道」の思想が孕まれているのである。

《補》

今日、レーニン死後の共産主義運動の混乱を特徴付ける一つに、統一戦線の問題がある。この機会をかりて、そのうちのいわゆる「労農同盟」の問題に言及しておこう。

日本においても、労働者の革命には「労農同盟」が不可欠であるという考えが、共産党のみならず、いわゆる新左翼をもとらえている。この理論が、レーニンの『二つの戦術』の歪曲とその教条化に端を発していることは言うまでもない。

まず『二つの戦術』を見てみよう。そこでは、ロシアにおけるブルジョア革命が前提とされている。すなわち「旧時代の残存物、農奴制の残存物…を最も断固として一掃するような、資本主義の極めて広範な、自由な、急速な発展を最も完全に保障するような、まさにそういう変革」(『二つの戦術』)が基本的前提である。

従って、直接に農奴制に苦しんでいる農民は、この変革によって決定的利益を得ることができる。そして同時に、当時のロシアの農民は、「私的所有を無条件に擁護することよりも、むしろこの所有の主要な形態の一つである、地主の土地を取り上げることに利益を感じてい」(同)たのであり、また「農民はプロレタリアートと闘争するのにさえ民主主義を必要とする」(同)ということからレーニンは、「農民は革命を最後まで遂行できるのであって、我々はこの点で、全力をあげて農民を援助しなければならない」(同)と主張したのである。

これらのことが、現在の日本の条件に当てはまるであろうか？ 否である。今日の日本は、「実践の上では

共和制の問題が社会主義の問題からほとんど分離できないような情勢にある」(同)。

現在の日本の農民の立場は、例えば「米価値上げ」のようなものが一般的である(もちろんそれは土地の所有に基礎を有している)。だが、素朴に考えてみても「米価」が安いほうが労働者にとって利益である。生産力の発展が生産者の利益の直結しないということは、社会体制に原因がある。労働者階級は、農民が資本主義を、私的所有を廃絶しなければならないという、すなわち、労働者階級の立場に移行するように働きかけなければならない。レーニンが「諸君はポリシェビキの権力か、それともブルジョアの権力か、そのどちらかを選ばなければならない」(コミンテルン第3回大会報告)としたように、農民に対して選択を求めなければならない。労働者階級は、個々の農民の運動に対して、この観点から(もちろん諸々の条件を具体的に分析した上で)態度を明らかにする必要がある。

農民が尻込みすることを恐れながら運動をしている諸君は、社会主義のための闘争を諦めるべきである。実際、まず労働者と農民の政府を樹立し、その後で「民主的に」(多数決か何かで)進むべき方向を一すなわち、そのまま資本主義を続けるのか、社会主義へ進むのか一決めるというのは、農民への、そしてブルジョアジーへの屈伏、追従でないというのだろうか。

今日問題となっているのは、労働者階級の社会主義的独裁、これ以外ではない。

〈3〉 グラムシの組織論

グラムシによれば、党とは知識人の集団である。そして、例によって、この「現代の君主」は、「指導」と「支配」の両側面から展開される。グラムシにとって問題は、「民族的～大衆的集団意志の形成」と「知的・道徳的改革」なのである。

まず前者、すなわち「指導」の面から見ると、グラムシは「ソレル主義」=無政府主義と「セクト主義」の両偏向を批判し、「感じる」と「知ること」、「自然発生的なもの」と「意識的なもの」の結合、「知識人と人民一国民との間の感情的結合」を抽象的に述べるだけである。だが、それまでのグラムシの実践をあわせてみるならば、その「結合」の架け橋となるのは、「日常的な要求」であることが明らかである。かくしてピオットは「党と大衆のあいだの弁証法では、グラムシは、ルカーチのように、レーニンの政治的主導主義と、ルクセンブルグの革命的な自然発生論とのあいだに位置する」と総括しているのである。

また後者、すなわち「支配」の面では、主に「官僚主義」の排斥を中心軸としており(従ってスターリン主義の克服が問題となるとき、しばしばグラムシが引き出されるのであるが)、誰でもが言うように「民主集中制」を唱えている。

だがそれは「党が進歩的であるとき、それは『民主主義的に』機能し、党が退歩的である時、それは『官僚的に』機能する」と言うように、単純に「党の進歩性」に解消されてしまい、あとは「ヘゲモニー」=知的・道徳的統一性という倫理的なものとしてしか語り得ないという、組織問題を観念的に考えるものが陥る共通の傾向を示しているのである。そして、「平凡人、普通人の広範な要素」「一貫した、主要な要素」「中間の要素」の三要素の「定比」や、「上級指揮・下級指揮・被統治者」の「三層論」の抽象的な図式に墮してしまっただけである。

以上のように簡単に素描したグラムシの組織論は、ルカーチのそれと同じように、社会学的には意味があるとしても、実践的には価値を有しないものである。

グラムシの思想は、「偉大な」オポチヨニスト=トリアツィを媒介に、「ユーロ・コミュニズム」として花開いている。もちろん我々は、グラムシがその実践からして、ベルリンゲルなどよりはるかに革命的であったことは認めるのにやぶさかではない。だが、グラムシの思想が、「ユーロ・コミュニズム」の萌芽をうちに含んでいたことは、これまでの所論から納得してもらえらるることと思う。

なお今日、いわゆる新左翼の中で、かつての「戦略」型革命を克服するのに、人民の統一戦線をもってしようとする人々が毛沢東主義に屈伏した部分のみならず登場してきているが、グラムシの戦術を見ればわかるように、先験的な「統一戦線」は別の革命「戦略」への転換でしかないということが理解できるだろう。問われているのは、綱領、戦術、組織総体にわたってマルクス・レーニン主義を貫徹することなのである。